



リハビリテーション医学全書 5

「測定と評価」

和 才 嘉 昭・嶋 田 智 明 著

患者の治療を進めて行く場合、彼らの持つ能力を的確に把握し、個々の症状に応じた適切な治療プログラムの設定が必要なことは万人が認めるところである。この過程に重要な役割を果たすのが測定と評価である。この分野において各テストの技術的な解説を行なっている文献は従来から多数あるが、本書に見る様にこれらを集大成し広汎にしかも多面的に捕えたものは内外に例を見ない。本書の特徴は測定・評価の単なる技術的な解説のみに留まらずこれらの実施の意義およびその解剖・生理学的背景を多数の文献的考察をもって説明している点である。我々が患者の評価を実施する時、ややもすれば機械的に行ないやすいが、本書に目を通すことにより、常にその意義と背景を確認したいと思う。

内容は四章により構成され、第一章では身体障害の基礎的説明、評価の意義と時期、報告書、用語解説などが総論として述べられている。第二章は形態測定で、身長、体重、周径、四肢長、姿勢について触れ、特に姿勢

については多くのページを割き、その定義から発達、解剖、評価の実際について述べている。第三章の運動機能評価が最も圧巻で本書の半分以上の部分を占めている。関節可動域測定、筋力の評価、感覚および知覚テスト、協調テスト、運動発達評価、成人片麻痺における運動パターンの評価について説明がなされ、それぞれの意義・解剖・生理学的特徴、評価の実際、文献的考察が論ぜられ、多数の評価表が示してあるので参考になる。最後の第四章は生理（維持）機能評価で、呼吸機能評価、循環機能評価、疲労判定法が述べられている。

以上の様に本書は測定と評価を網羅した唯一の本であり、関連分野の学生の教育の場、患者を実際に前にした臨床の場で大いに助けとなり、また活用しなければならぬ本である。

(医歯薬出版発行、1975 年、¥ 6,000)

(兵庫県リハビリテーションセンター 山下 隆昭)

「親こそ最良の医師」

グレン・ドーマン 著・幼児開発協会 訳

この本は専門家の書いた本でありながら決して難しい専門書ではない。実に読み易く、解りやすく書かれており、全体を通して著者の障害児への限らない愛と深い探究心とに満ちあふれている。師テンプル・フェイとの出会い、脳障害児の治療にたずさわったいきさつに始まり、30 数年間にわたる治療と研究の過程と成果が、その時々のエピソードをはさんで克明に書きつづられている。世間の心ない非難、同僚の敵視にある時は傷つき、またある時は絶望しながらそれでも尚かつ、真摯な態度で反省を繰り返していく姿を書の中に見て自己嫌悪さえ覚える。

治療にいきづまった時は正常とは何かを考え直し、おびたしい数の正常児を観察直しては次々に新しい発見をし、またその現実に対しては常に疑問の目を向け議論をたたかわすくぐり、マンネリ化している我々への

教訓にさえ思える。

専門書ではないと言ったが、治療の方法や過程についても詳細に書かれているので、我々リハビリテーションにたずさわる者にとっても実に参考になる。ブルンストロームやボバース等々、現在脚光を浴びているテクニックもさることながら、フェイのこうした古典的治療法から発展した治療方法を見直す時期が来ても良いのではないかな。またこの本はその題が示すように障害児をもつ親にとっても大変希望的なものである。

幾多の挫折にもめげず、障害児の治療に情熱を傾けてきた著者は、自信をもって治療に最も必要なのは親の努力と忍耐とそして何よりも強い愛情であると述べている。是非一読をおすすめする。

(サイマル出版、¥ 1,300)

(和光園、理学療法士 田原 澄彦)